[2]　次の文章は、宮島未奈作「成瀬は天下を取りに行く」の一部である。主人公である広島の錦木高校２年生西浦航一郎は、高校入学を機にそれまでやっていた柔道をやめ、幼なじみである中橋結希人に誘われ、かるた部に入部した。高校二年生になり、全国大会に出場した主人公は、そこで「彼女」（膳所高校かるた部「成瀬あかり」）に強く惹かれる。以下はそれに続く部分である。よく読み、後の各問いに答えなさい。（出題の都合上一部を変更しています）

盛大にセミが鳴く滋賀市民センターで、俺はひとりの選手から目を離せずにいた。

第四十五回全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会団体戦Ｄブロック一回戦。俺たち広島県代表錦木高校は大分県代表と戦っている。俺は抜け番で、部屋の隅から試合の行方を見守っていた。

試合をしている四十人の中で、滋賀県代表膳所高校の五番席に座る彼女だけ何かが違っていた。とにかく動きが大きいのだ。もっと無駄なく払う方法があるだろうと思うのだが、それでいてちゃんと狙いの札は射止めている。素振りのフォームも独特で、見たことのない腕の動かし方をしていた。

あんなのが対戦相手だったらペースを乱されて大変だろうなと眺めているうちに、[1]いつのまにか目が離せなくなっていた。彼女が札を払うたび、ちょんまげにした前髪が揺れる。絶え間ないセミの鳴き声に混じって、どこからともなく鐘の音が聞こえた気がした。

「桃谷先輩を見た瞬間、ゴーンゴーンって鐘の音が聞こえたんだよ」

「またかよ」

結希人の恋愛話に付き合うのは何度目だろう。俺がまだ男女の区別もついていないような頃から、結希人は「将来はれい先生と結婚する」と色気づいていた。小学生のときは大学生のお姉さんに惹かれて地域のサークルに入っていたし、中学に入学したときも美人の先輩目当てに吹奏楽部に入った。錦木高校を目指したのも、塾で一目惚れした女の子の志望校だったからだ。その子は直前で志望校を変えたのか、一緒に入学することは叶わず、結希人は新たな出会いを探していた。

「それで、俺も桃谷先輩と同じかるた部に入ろうと思うんだけど、[2]にっしゃんも一緒に入らない？」

「かるた？」

競技かるたの存在は知っているが、一度もやったことはない。錦木高校は広島県代表として何度か全国大会に出ているという。

「YouTubeでかるたの試合を見たんだけど、おまえみたいな大男はいないから面白いと思うんだ。それに、畳の上で戦うことには慣れてるだろ？」

あまり関係ない気がするが、たしかに俺は去年の夏まで白い道着で畳の上に立っていた。身体が大きいという理由だけで、小さい頃から柔道教室に通わされていたのだ。まわりの期待に応えるかのように一八六センチ、一〇〇キロまで育ったものの、試合ではたいした結果を残せなかった。同じ体型の弟は県大会で優勝するほどの実力者なので、向いてなかったのだと思う。

柔道には見切りをつけて、高校からは何か新しいことをはじめるつもりだった。結希人にもそんな話をしていたから、俺を誘ってくれたのだろう。

翌日、俺は結希人とかるた部の見学に行った。三年生と二年生は合わせて十二人で、全員女子だった。見学に来ている一年生も女子ばかりだ。これまで女子とは縁遠い人生を送ってきたから、俺一人だったら確実に逃げ出していた。

三年生の桃谷先輩はマスクで顔が隠れていても雰囲気のある美人で、結希人の一貫した好みがうかがえた。これまでの反省を生かして別のタイプを狙うべきだと思うのだが、そうしないところが結希人の美学なのかもしれない。

「大きいね、何かやってたの？」

人の良さそうな垂れ目の先輩が話しかけてくる。

「小さい頃から柔道をやってました」

「えー、すごい」

「手が大きいから有利なんじゃない？」

先輩たちが俺を取り囲んでわいわい盛り上がりはじめた。まるでゆるキャラの着ぐるみになったかのようだ。助けを求めるように結希人を見ると、さっそく桃谷先輩に話しかけているところだった。

成り行きで入ったかるた部だったが、練習すればするほど上達するのが面白かった。成果の上がらない柔道を惰性で続けてきたのだからその差は歴然[A]だ。練習の甲斐あって、一年生のうちに初段を取得することができた。

二年生になり、めでたく全国大会団体戦へのきっぷをつかんだ俺たちは、かるたの聖地である滋賀県大津市に乗り込んだ。

メイン会場は近江神宮の近江勧学館だが、そこで予選を戦える学校はごく一部だ。主将の尾上先輩が引き当てたDブロックの会場は一駅隣の滋賀市民センターで、その古びた外観を見たときにはがっかりした。家の近くにある公民館と大差なく、新幹線に乗って遠路はるばるやってきたのはなんだったのかと思ってしまう。

しかし、この会場だったからこそ彼女を見られたのだと思うと、運命めいたものを感じる。彼女が十枚差で相手を下したときには、[3]もうあの動きを見られないのかと残念だった。使い終わった札を揃えた彼女は、正座で背筋を伸ばしたままチームメイトを見つめている。その様子を見て、俺はあわてて錦木かるた部に目を向けた。

結果、錦木高校は一回戦負け。膳所高校は二回戦進出を決めた。彼女は無表情のままチームメイトとハイタッチをして、部屋を出ていく。

「どうした？　かわいい子いた？」

彼女を目で追っていると、結希人が目ざとく指摘してきた。

「いや、なんでもない」

とっさに否定したが、顔が熱くなっているのがわかる。最後に読まれた札が「忍ぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで」だったことが否応なく思い出される。からかわれるかと思ったが、結希人は真剣な顔で「気になる子がいるなら絶対話しかけないとだめだよ」と俺の腕をつかんで部屋の外に出た。

「どの子？」

背中に「膳所」と書かれた黒いTシャツの集団はすぐに見つかったが、彼女の姿はなかった。

「いないみたい。次の試合の準備もあるだろうし、戻ろう」

俺はただ彼女の動きが気になっただけで、話しかけたいとかそういう気持ちは一切ないのだ。桃谷先輩に振られたあとも、女子との出会いに期待してかるたを続けている結希人とは違う。さっさと宿に戻って、明日の個人戦に備えたい。

「いやいやいや、一人でいるってことでしょ？　［　Ｘ　］のチャンスじゃん」

勝手に色めき立つ結希人の向こうから、彼女が歩いてくるのが見えた。俺の表情の変化を感じ取ったのか、結希人が振り返って「あの子だな」と狙いを定める。

「こんにちは。僕は広島県代表、錦木高校二年の中橋結希人です」

あまりに迷いなく話しかける結希人を見て、俺はあっけに取られていた。知らないやつから話しかけられたら誰だって警戒するだろう。俺がヒヤヒヤしていると、彼女は意外にも表情を緩めて応えた。

「わたしは膳所高校二年の成瀬あかりだ。大津へようこそ」

RPGの村人みたいな口調に違和感を覚える。普段からこんなふうなのだろうか。
「こいつが成瀬さんに興味を持ったみたいで」
結希人が言うと、成瀬さんが俺の顔を見上げた。目が合っただけで萎縮してしまい、前髪のちょんまげに向かって「同じく錦木高校二年の西浦航一郎です」と名乗るのが精一杯だった。
「そうか」
成瀬さんはうなずいて、マスクの位置を直した。
「ゆっくり話をしたいところだが、あいにくこの後も試合がある。明日は個人戦だ。あさってなら空いているのだが……まだ大津にいるか？」
俺も結希人も明日の夜には広島に帰る予定だ。きっと成瀬さんもそれをわかっていて、体よくあしらおうとしているのだろう。穏便に済みそうだとほっ④したのに、結希人が間髪いれずに「うん、大丈夫」と答えた。
「それはよかった。あさって午前十時三十分に、大津港まで来てほしい。[注3] ミシガンに乗ろう」
「ミシガン？」
かろうじてつぶやいた俺だったが、チームメイトに「なるぴょーん」と呼ばれた成瀬さんは「すまない、また会おう」と言い残して去っていった。

【語注】 注1 かるた部……競技かるた＝小倉百人一首を用いて、一般社団法人全日本かるた協会が定めた規則に則って行う競技をする部活動。
注2 忍ぶれど～問ふまで……平兼盛が詠んだ百人一首四十番の歌。訳「心に秘めてきたけれど、顔や表情に出てしまっていたようだ。私の恋は、『恋の想いごとでもしているのですか？』と、人に尋ねられるほどになって。」
注3 ミシガン……琵琶湖の琵琶湖大橋より南に位置する南湖を周遊する観光外輪船。

問一 ～～線部A～Cの語句の文中での意味として適当なものをそれぞれ選び、その番号をマークしなさい。

A 「歴然だ」
① 歴史的だ
② 経過だ
③ 明白だ
④ 微妙だ

B 「目ざとく」
① 見つけることが早く
② 目が覚めやすく
③ 見る目がなく
④ 物事の本質を見抜く

C 「あっけに取られ」
① 集中して
② びっくりして
③ 圧倒されて
④ 心配されて

問二 ［ X ］に補うのに適当な四字熟語を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。
① 一日千秋　② 一喜一憂　③ 千変万化　④ 千載一遇

問三 ――線部①の「鐘の音」とはどのようなものであるか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。
① 大きな動きの独特のフォームが、鐘をついているかのように思えたこと。
② 絶え間ないセミの鳴き声が、まるで鐘の鳴る音のように聞こえたこと。
③ ちょんまげにした前髪が揺れるのが、鐘のように思えてきたこと。
④ 一人の女の子に惹かれる気持ちが、心の中で響いていたこと。
⑤ 競技の終了を知らせるために、会場全体に音が鳴り響いたこと。

問四 ――線部②のように「結希人」が主人公に、「かるた部」入部を勧めたのはどうしてだと主人公は考えているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。
① かるた部の先輩を口説くのには一人だけでは心配で、幼なじみの主人公にもかるた部に入部してほしかったから。
② 体の大きな主人公と一緒に入部すれば、自分に対しても先輩達が好意を抱いてくれるに違いないと考えたから。
③ 競技かるたの存在を知っていた主人公が一緒なら、知らないことも聞けて恥をかかなくてもすむと考えたから。
④ 先輩は全員女子で、見学に来ていた一年生もすべて女子なので、男子一人ではさすがに心細かったから。
⑤ 柔道ではたいした結果を残せなかったので、高校では何か新しいことを始めたいと主人公から聞いていたから。

問五 ――線部③のようにしたのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。
① 「彼女」が正座で背筋を伸ばしてチームメイトを見つめている姿があまりにも輝いており、直視できなくなったから。
② 「彼女」が「彼女」のチームの戦況をじっと見守っていることに気づき、自分もそうすべきだと気づいたから。
③ 「彼女」のことをじっと見つめていることを、「彼女」に気づかれそうになり目をそらしたから。
④ 「彼女」のことをじっと見つめていることを、錦木高のチームメイト達に気づかれそうになったから。
⑤ 「彼女」と自分との出会いに運命めいたものを感じ、そう導いてくれた錦木高に感謝する気持ちが出てきたから。

問六 ――線部④のように主人公が感じている理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。
① 高校に入学する以前は柔道に打ち込んでいて、女の子と話したこともなく、一生女の子を好きになることがないのではと心配だったが、自分も女の子を好きになれたと感じたから。
② 新幹線に乗ってはるばる広島からやってきたのに一回戦で負けてしまい、何のために来たのかと思っていたが、気に入った女の子とデートをすることができそうと感じたから。
③ 初対面の女の子と何を話していいかもわからないし、幼なじみの結希人が勝手に話を進めてしまい困っていたところ、女の子の方から断ろうとしていると感じたから。
④ 初対面の女の子と何を話していいかわからないで困っていたところ、幼なじみの結希人が話をどんどんと進めていってくれて、なんとかデートできそうだと感じたから。
⑤ 突然鐘の音が聞こえた気がしたが、それは、結希人が、誰かを好きになったときに鐘の音が聞こえたといっていたのと同じだと気づき、病気ではないのだと感じたから。